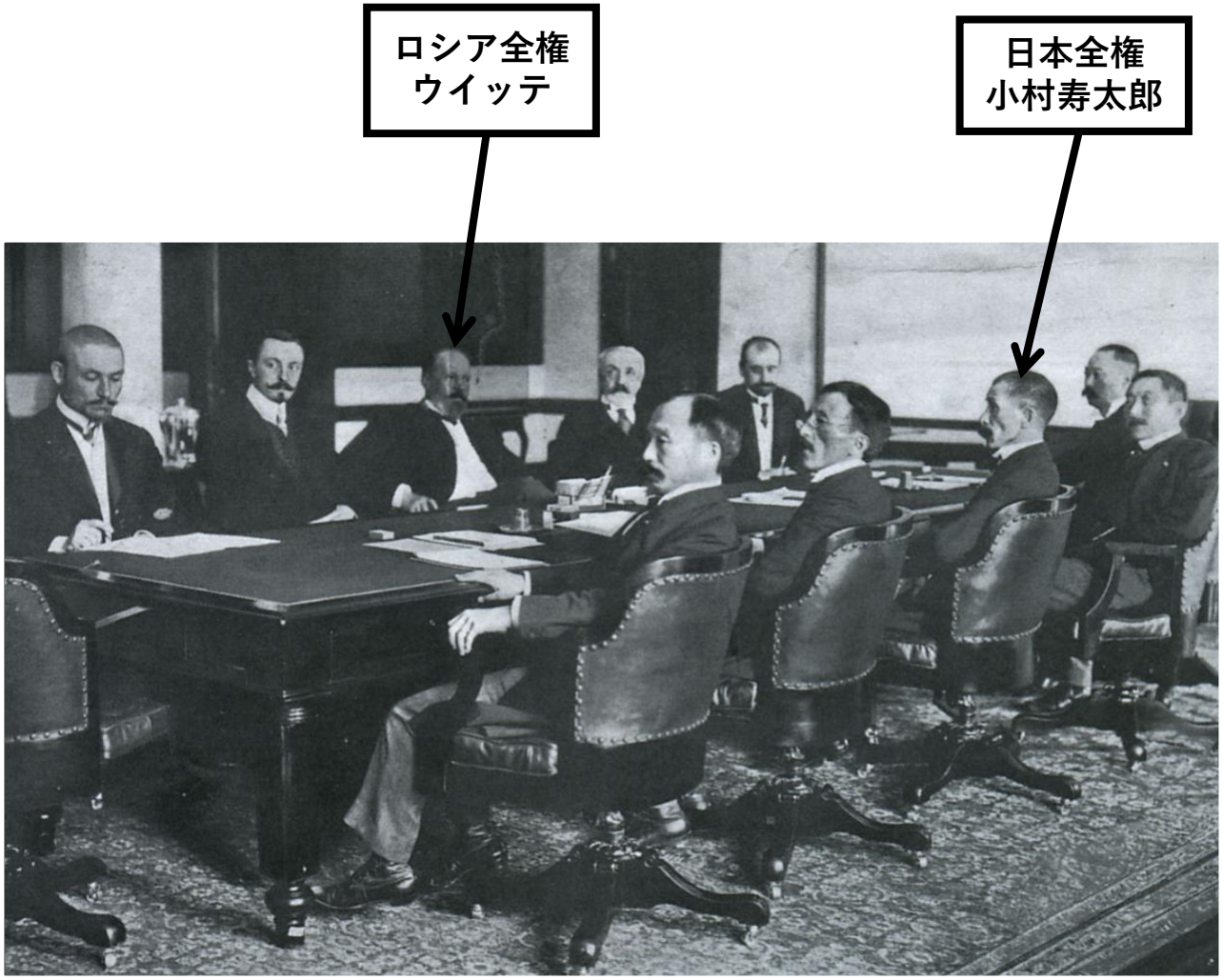
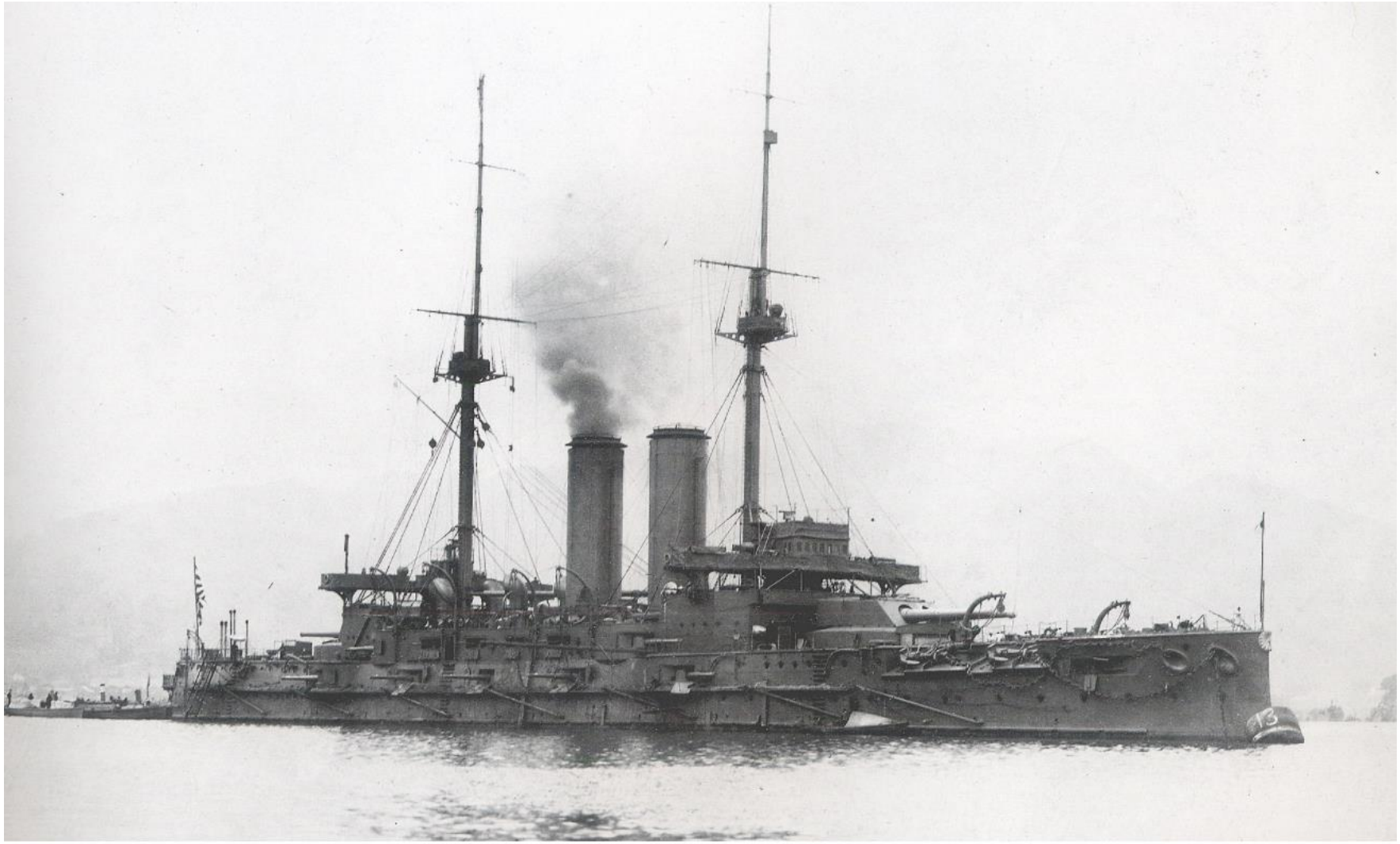
日本海海戦の勝利（1905年5月27日）

ポーツマス講話条約締結（1905年9月5日）



Wikipdiaより

三笠佐世保港内で火災により沈没（1905年9月11日）



1905年2月頃の写真

Wikipdiaより

連合艦隊解散の辞（1905年12月21日）

以下「連合艦隊解散の辞」を現代に視点から解りやすく抜粋してみた。
文責は筆者にある。

●二十ヶ月戦いは過去となり、連合艦隊は任務を果たし解散する。艦隊は解散しても、海軍軍人の務めや責任が軽減することはない。

●この度の戦の成果を生かし、平時戦時の別なく、外の守りに対し重要な役目を持つ海軍が、常に万全の海上戦力を保持し、その危急に対応できる構えが必要である。

●**戦力というものは、兵器の数だけで定まるものではない。これを使用する無形の力にも左右される。「百発百中の砲一門」は「百発一中の砲の百門」に対抗できる。すなわち軍人は訓練に主点を置かなければならない。**

●この度の勝利は**将兵の平素の練磨によるものであり、**たとえ戦いは終わったとはいえ、安閑としてはならない。

●武人の一生は戦いの連続であり、その責任は平時であれ戦時であれ、**ことが起これば戦力を発揮、事がないときは戦力の涵養につとめ**、ひたすらにその本分を尽くすことにある。過去一年半、あの風波と戦い、寒暑に耐え、たびたび強敵と相対して生死の間をさまよったことなどは、容易な業ではなかったが、**これもまた長期の一大演習であって**、これに参加し多くの知識を啓発することができたのは、武人としてこの上もない幸せであったというべきであり、**どうして戦争で苦労したなどといえようか。**

●**武人が太平に安心して目の前の安楽を追うならば、兵備の外見がいかにりっぱであっても、それはあたかも砂上の楼閣のようなものでしかなく、ひとたび暴風にあえばたちまち崩壊してしまうであろう。**

●近世に至っては、**徳川幕府が太平になり、兵備をおこたると、数隻の米艦の扱いにも国中が苦しみ、またロシアの軍艦が千島樺太をねらってもこれに立ち向かうことができなかった。**

●西洋史をみると、十九世紀の初期、ナイル及びトラファルガー等で勝った英国海軍は、祖国をゆるぎない安泰なものとし、その武力を維持し世界の趨勢におくれなかったから、今日に至るまで永く国益を守り、国威を伸張することができた。

●古今東西のいましめは、政治のあり方にもよるが、**武人が平和なときにあっても、戦いを忘れないで備えを固くしているかどうかにかかり**、それが自然にこのような結果を生んだのである。

●われ等戦後の軍人は深くこれらの実例を考え、これまでの練磨のうえに戦時の体験を加え、さらに将来の進歩を図って時勢の発展におくれないように努めなければならない。

●神は平素ひたすら鍛練に努め、**戦う前に既に戦勝を約束された者に勝利の栄冠を授けると同時に、一勝に満足し太平に安閑としている者からは、ただちにその栄冠を取り上げてしまうであろう。**

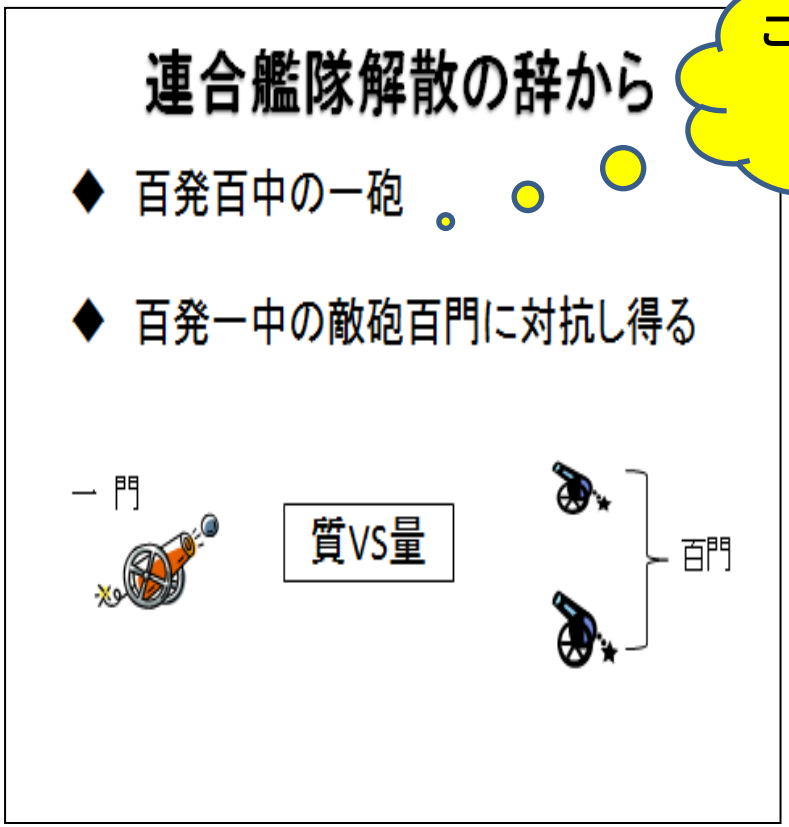
●昔のことわざが教えている**「勝って、兜の緒を締めよ」**

明治三十八年十二月二十一日

連合艦隊司令長官 東郷平八郎

教条原理主義が思考停止に？

三笠の爆沈を見るに、海軍将兵の気が緩んでしまっているのではとの海軍上層部の危機感が本解散の辞に現れているような気がする。
それを戒めるために「**「百発百中の砲一門」は「百発一中の砲の百門」に対抗できる**との解りやすい例示をし、訓練の重要性を説いたものと思われる。
しかし、論理的にはその逆であり、大艦巨砲を信奉する「教条」へと一人歩きしていったのではないか？



これは論理的に正しいでしょうか

「大艦巨砲」絶対の教条主義へ傾倒していったのではないか？